

第3期ウィズあかし運営委員会  
第4回ウィズあかし専門委員会議事録

2024年10月30日(水) 18:00~20:00

複合型交流拠点ウィズあかし 8階803学習室

参加者：専門委員 5 名 明石コミュニティ創造協会スタッフ 8 名

1. 開会のあいさつ

〈事務局〉

本日はお忙しいところ、ウィズあかし専門委員会にお集まりいただきありがとうございます。  
年度も半分以上すぎ、今年度の折り返し地点を過ぎてラストスパートに入っていこうという時期になっております。既存の事業の継続や改善だけでなく、新たな事業にも本腰を入れて取り組んでいます。来年度の取り組みも検討していく時期だと思っております。

今回は、「生涯学習」という広いテーマですが、意見交換をしながら、今後の取り組みのヒントにさせていただければと思っております。大所高所からのご意見、アドバイスをいただきたいと思います。限られた時間ではありますが、よろしく願いいたします。

2. 1)本日の趣旨説明

事務局より口頭で第4回ウィズあかし専門委員会の趣旨説明及び配布資料の確認を行った。

2)自己紹介

専門委員5名及び明石コミュニティ創造協会スタッフ8名が自己紹介を行った。

3)前回の振り返り

事務局よりスライドを使用して、第3回ウィズあかし専門委員会の振り返りを行った。

3. 報告

事務局より「ウィズあかしの生涯学習の現状・認識している課題」について、スライドを使用して報告を行った。

4. 質疑応答及び意見交換

〈専門委員〉

感想としては、十分に取り組んでいるように思うので、「課題」というように厳しく考えなくてもいいように思うが、なぜ「課題」だと考えているのか？他機関連携や集中と選択とあるが、もう少し具体的にどのようなところか？

〈職員〉

他機関連携でいうと、図書館と一緒に講座は実施しているが、読み聞かせや料理教室が多い。そのような機会も大事だと思うが、例えばひとり親世帯に向けた機会等、まちや社会の困っている方

に向けた生涯学習が必要でないかと思い、論点としてあげている。

〈専門委員〉

それを進めようと思うと難しいということか？

〈職員〉

どこに学びを届けるべきか把握できていないことに課題感を持っている。

〈専門委員〉

孤立している方や困難を抱えている方にも届けることを進めたいということか？

〈職員〉

現状としては、センターとしてやるべきことなのではないかと考えている。しかし、その視点自体がどうなのかというところも、ご意見いただければと思っている。

〈専門委員〉

シチズンシップ、協働のまちづくりにつながるような学び、消費的な学びではないといったところが印象的だった。位置づけとして、他にも学びの機関がある中で、全体を俯瞰できるポジションにいるのではないかと思う。独自の事業も大事だと思うが、「学びの場づくり」がウィズあかしの強みなのではないかと感じた。様々な学びの場をつないで、その中から課題を拾い出す、交流の機会をつくることのできるのではないか？

生活に困難を抱えていたり、孤立していたりすると、来ていただくことが難しい状況がある。そんな中で、どう学びを届けるかは難しいが、市の各課と連携してニーズを把握し、そのニーズに対してアプローチしていく方法もあるのではないか？

〈職員〉

市との連携はまだまだ弱い。情報収集を市にしていくということか？

〈専門委員〉

課題を抱えているところにアプローチするには、独自に情報収集するのは大変だと思う。課題解決という意味では、行政との連携のあり方も検討することも必要だと思う。

〈職員〉

直接的なアプローチと、つなげていくことでのアプローチもあるのではということか。

〈専門委員〉

課題を見つけに行くことと、他の人が感じている課題や専門の部署が抱えている課題を拾いに行くということ。

〈専門委員〉

課題意識として、制度の支援からこぼれ落ちていることや、行き届かないことへのもどかしさを感じているように思う。男女共同参画としては、シングルマザーなどへのアプローチはできていると思うが、余暇やセカンドキャリアなどの+αの学びの場になっているのではないか。課題と出会うためには、「リサーチ部隊・事業」がいるのではないか。旧態依然の生涯学習が柱であっていいとは思いますが、「混ざる」「対話」がもっとあっていいのではないか。ティーチングやアクティブラーニングが多いように感じる。ボランティアや就業体験なども学びだと捉えることも必要だと思う。

あかし楽についてですが、今回のテーマだけだと流行りを追ってるように見えてしまうので、過

去のあかし楽の情報を蓄積していくアーカイブ的なこともあっていいのではないか。

〈職員〉

リサーチであったり、混ざるであったり、ニーズをキャッチする機会をつくることが大事だということか。

〈職員〉

リサーチ部隊を進めていくにはどうしたらいいか。

〈専門委員〉

手法やメディアは変わるかもしれないが、フリーペーパーのような情報紙を、まちの情報を取り上げることをねらって発行していた。情報発信という体で人に会いに行くことをしていた。「一緒にやりましょう」「なんかやりませんか？」は、受け手からすると面倒くさいものかもしれない。例えば、情報紙にワンコーナー作って、取材という形でその業界・現場の悩みを聞くという裏ミッションをつくっておくのもいいかもしれない。

〈職員〉

前回、「ローカルグッド・あかし」で、「銭湯」をテーマにした情報紙をきっかけに、まちとつながりをつくるお話させていただいたかと思う。改めて、裏ミッション・目的を持って進めていくことが大切だと感じた。

〈専門委員〉

あかし楽に関わりがあり、当時は集客をメインにした歴史講座だった。リカレント教育など社会人の学びなおしも話題ではあるが、明石で同じことをするのも違う気がする。市民の人たちのニーズを捉えられるのか、ニーズは分からないけど掘り起こしてみるのか、生涯学習だからこそ自由にしてもよいのではないか。

〈専門委員〉

選択と集中の点では、スクラップ&ビルドが必要ではないか。日本の社会では、スクラップがしづらい風潮がある。市民もやっていて楽しくないものから削ぎ落して、やりたいことをやりたい人や巻き込み力のある人と楽しい場をつくるのもよいのではないか。

〈職員〉

「やりたいことができて、楽しい場であるといいのでは」というお話と、「いろいろな学びの場をつくる、つなげる」というお話がリンクするところがあるのではないかと感じた。

〈専門委員〉

選択と集中でいうと、孤立した方へ学びが届いていないという課題意識は分かるが、それをやるのがウィズあかしの役割なのかが疑問である。福祉の範囲になり、かつ専門性が必要になる。足りていない学びを届けるのであれば、例えば、こどもの学習支援など学びを享受できていないところに提供することが、本当のニーズかもしれない。そうなったときに、COMiSOの専門性を発揮できるのかは引っかかるところがある。そういった領域は、専門機関と連携した支援や学びの場をつなげることで、必要な学びを享受できない方へのアプローチは、連携することでできることがあるのではないか。

〈職員〉

ニーズや課題をどういう角度から発見するのかという点で、自分たちが見つけに行くのか、専門的などころにアプローチすべきなのかが、まだ定まっていない。また、そのニーズや課題のまわりには、どんな資源があるかないかを把握し、ないのであればウィズあかしとしてアプローチしていくかどうかという論点もあると感じた。

〈専門委員〉

講師カタログはどれぐらい活用されているのか。

〈職員〉

現在は、中学校コミセンのエリアマネージャーが市民講座の講師を探す際に活用されているくらいである。そこで、昨年度 web 版のカタログとしてリニューアルしたが、講師カタログがどう活用されているか捉えきれないことは課題だと感じる。

〈職員〉

講師を探すという点では、講師の雰囲気や講座内容を実際に見られる場としてウィズフェスに足を運ぶエリアマネージャーもいる。また、市民活動団体などエリアマネージャー以外の講師を探している人が、講師とつながれることを期待して web 版にリニューアルした。

〈専門委員〉

みんなの講座・みんなの先生・みんなの教室というステップアップがあるが、みんなの学校はみんなの教室のことか。

〈職員〉

「みんなの講座」は、市民講師になりたい・やってみたい人向けに、講師デビューを応援する事業である。書類・面談で選考し、企画づくりから実施およびふりかえりの機会を通じて、講師としてのスキルアップを図ってきた。また、「みんなの先生」は、講師カタログと近いもので講師の登録制度である。そして、登録した講師が、自分でやってみるための機会提供として「みんなの教室」がある。しかし、この仕組みだけでは、人材との出会いが限定的なことに課題があったため、多くの人が気軽に得意なことや好きなことを活かせる機会として「みんなの学校」を始めた。

〈職員〉

講師カタログに掲載している講師は、みんなの学校などウィズあかしと関わりのある講師だけなので、中コミなどで活躍している講師は載っていない。

〈専門委員〉

みんなの学校のパンフレットの方が、アーカイブ的な機能があるように感じる。ちなみに、中コミに来館する利用者は高齢者が多いのか。それとも、地元の子どもたちもいるのか。

〈職員〉

高齢の方が多い。講座内容によっては、親子連れも来ることもある。

〈職員〉

中コミでは、コミセン高齢者大学というイメージを変えるためにコミセン改革を進めているところもあり、少しずつ変わってきているように感じる。

〈職員〉

学校の施設内にあるという特殊な環境なので、来館しやすくするために図書スペースやフリースペースを設置しているところもあるが、これまでの経緯で、高齢者学習の場所という印象が強いところはあ

〈専門委員〉

孤立している人やひとり親の方は、こういった機会や場に来てほしいのか。

〈職員〉

例えば、自分時間をつくるような講座を通して、生涯学習に取り組むための土台を整える機会や、サロンでの交流を通して他者の視点や考えを知る場に来てほしい。

〈職員〉

そういった対象に特化した企画はできていない。オープンな場に来てもらったらいいかもと議論をしている段階。公共施設かつ男女共同参画センターも複合しているからかもしれないが、チラシを探しに来た方と少し話してみると、相談まではいかないけど家庭環境が複雑な方と対峙することもある。そんななかで、生涯学習センターとして、果たして楽しい事業だけでいいのかを検討している。すでにそういった事業を提供しているところもあるかもしれないなかで、その一手を打つべきなのかが悩ましいところでもある。

〈専門委員〉

もし、そういった方が来られたとしても、情報提供などはしていることは分かった。ひとり親の方などが、安心して参加できる場があるといいと思うが、地域に近すぎても参加しづらいこともあるので、明石ぐらいの規模がいいかもしれない。シングルマザーのためのというよりは、ひとり親の方も一緒に楽しく遊べるといった見せ方の方が、気軽に参加しやすいかもしれない。毎年8月にある現況届の手続きなど申請の担当課とタイアップして、情報提供をして実施するのもいいかもしれない。困難女性支援法ができて、急性期や深刻な方は市役所で対応すると思うが、地域での長期的な支援として企画したり、家族性を出さないなどのチラシの見せ方を工夫したりすることでメッセージを伝えることもできると思う。

〈職員〉

参加の入り口を広げて、来た人にさらに情報提供するといった複合型のウィズあかしだからこそその強みを活かせる部分かもしれない。

〈専門委員〉

みんなの学校の雰囲気を見ると、好きなことを話したい・聞いてほしいというよりは、プロが営業っぽいことを試しているようにも感じるが、位置づけや実態はどうか。

〈職員〉

感覚的には、好きなことを話したい・聞いてほしい感が7、プロが営業っぽいことを試している感が3といったところである。市民活動支援センターでもあるので、もともと活動をしている方が見せ方を変えて参加している人もいたり、商業施設が同じ建物に入っているので企業が参加したりしている。営業につなげていく様子は、あまり感じていないのが現状である。

#### 〈専門委員〉

選択と集中の話などで感じたのは、色々な人が生涯学習で仕立ててアレンジしてくるようなプラットフォームのシステムができているような感じがした。例えば、男女共同参画で活動している人が「生涯学習」というお題を与えられて考えてみる機会になっているのではないかな。もしかすると、「あかし楽講座」のようにアウトリーチしていくよりも、だれかが何かしたいと思った時にウィズあかしをチェックしていると取りこぼしがないようなプラットフォームに特化するのかもしれない。みんなの学校のパンフレットをみると、被っている講師も見受けられるが、これは枠を埋めたいのか、講師のやりたい思いとどちらが強いのか。

#### 〈職員〉

講師のやりたい思いが強い。今年度も何名かお断りをしている人もいる。

#### 〈専門委員〉

やりたい思いを叶えることも必要だが、例えば、日本語学校や外国人労働者の支援をしているNPO法人・ひとり親の支援している人・社協などに声掛けをしてみるのもいいのではないかな。現状、余暇の充実が多いようにみえるので、社会的な話題の講座があると見え方も変わるのではないかな。

ただ、ニーズ調査だけをやるとなるとコストが掛かるだけなので、パンフレットを「メディア」と考えてリサーチを兼ね、講座の1割2割ぐらいは、声掛けをする枠として置いていてもいいのではないかな。

そうしないと、第2次明石市生涯学習ビジョンの基本理念2（性別、年齢、障害の有無など多様性を認め合う共生社会）へのアプローチが弱く感じる。明石市は、基本理念1（全ての市民が自己実現を図り豊かな人生を送れる社会）と3（市民の公共意識（シチズンシップ）が高い社会）は上手なイメージがある。一方、基本理念2は、専門部署だけで担っていて、生涯学習のセッションでの取り組みが見えないように感じる。

#### 〈職員〉

ひとり親支援課のような課もあり、シングルマザーズフォーラムなど明石での活動があるなかで、切り口としては生涯学習が必要だと思う。我々が取り組むべきところとなると、プラットフォームとなると「学びを広げるための環境づくり」を進めるのか、主催者として「地域や社会に必要な学びの提供」を進めるのかに迷いがある。「学びを広げるための環境づくり」のためにリサーチをしていく、その中でみんなの学校でエッジを立てることで「地域や社会に必要な学びの提供」につながっていくように、両方の間になるものがあると感じている。

軸を立てて取り組む「地域や社会に必要な学びの提供」は、他にはないテーマに特化するような進め方もあると感じた。

#### 〈専門委員〉

選択と集中という話もあったので、改めてスクラップアンドビルドが必要だと感じた。削ぎ落して、マンパワーの余裕を持って新事業に取り組むことが必要ではないかな。

#### 〈職員〉

現状の事業が、「学びを広げるための環境づくり」なのか、「地域や社会に必要な学びの提供」なのかの整理をしてもいいのかもしれない。

ほかにも、生活に困難を抱える家庭の学習支援の取り組みなど、貸室を使って一般公開されているものの把握は必要だと感じた。把握することで、つないでいくこともできるのではないか。

〈専門委員〉

「地域や社会に必要な学びの提供」であれば、「この人がやっている活動は知ってほしい」で尖らせていくこともできる。また、社会包摂的なアプローチであれば、こども食堂が貧困家庭の支援だけでなく、地域の居場所としての可能性を感じて、アーティストとオリジナルプログラムをつくっている例もある。ウィズあかしのコンテンツで、こども食堂の悩みにアプローチしていくこともあるのではないか。マイノリティへの「面」でアプローチしていくのか、活動している・したい人の目指すフラッグを立てるのか、だれもやっていないことにアプローチしていくのかが「地域や社会に必要な学びの提供」になってくるのではないか。

ただ、そこに注力せずに「学びを広げるための環境づくり」と「地域や社会に必要な学びの提供」の間が取り組むべきところだという考え方もある。

〈専門委員〉

以前、ウィズフェスに参加して、目玉になるものがあるといいなと感じた。取り組みがいいからこそ、もっと多くの人に知ってほしい。知り合いがやっているから来る、目当てのものを見たら帰るパターンが多いように感じる。オープニングに目玉になるコンテンツの開催や、テーマを設けたフォーラムの同時開催などがあると、分かりやすく人が集まるかもしれない。

〈職員〉

あわせて、「わたしも行っていいんだ」「参加してみたい」などと思ってもらえる見せ方の工夫も必要だと感じた。

〈専門委員〉

注力していきたいテーマが見えてきたら、それに絡めることもあり得ると思う。

〈専門委員〉

ウィズフェスは、プロ的な取り組みとアマチュアの活動発表が混ざっている感じなのか。

〈職員〉

今回のウィズフェスは、この機会にチャレンジしてみたい思いのある人を中心に募集した。98組が出展し、内45組が初めてこういった活動発表の場に参加している。

〈専門委員〉

基本理念2でいくと、障がいのある方やセクシャリティなどどのような団体が出展するのか。

〈職員〉

アスピア館内の店舗や障がいのある方、貸室利用者が出展する予定である。

〈職員〉

多くはないが、拒むことはないので、出展のハードルは高いことはないと思う。出展者のなかにも、当事者団体もいたりする。

〈専門委員〉

すごいことをやっていると思うので、そういった多様な出展者がいることを把握しておくことが大事かもしれない。

〈職員〉

不登校や発達障がいに関するサロンを開催している団体がつながって、ウィズフェスにコラボで出展するといった事例もある。

〈専門委員〉

サロンの場が、多様性を生むことにつながってくるのではないか。場のつくり方で、サロンをやってみようと思うグッズなどの仕掛けをやってみても面白いかもしれない。

〈職員〉

「学びを広げるための環境づくり」をしっかりとやるのが、攻めになるのではないかと感じた。この環境づくりを充実していくことでエンパワメントされた人が、次の学びにつながっていくこともある。

〈専門委員〉

活動を始めたい知り合いに、プラットフォーム（登録制度や活動の場など）を伝えたことがきっかけで、ネットワークが広がり、活動の充実につながっていることもあり、改めてプラットフォームの必要性を感じた。

〈専門委員〉

大学の学園祭の話ではあるが、大学生が出展するラーメン屋さんで列に並んでいるときに、付箋とペンを持って「あなたの夢について聞かせてください」と配っていた。貼られた付箋を見てみると、思った以上に本音で書いてある。おそらく、コーヒーとかもそうだが、いい匂いや場の雰囲気ですぐ人が緩む環境（勝手に自己開示している状態）であると思う。そういった環境で、リサーチ活動をするのが面白いかもしれない。

〈専門委員〉

コミセンの方々が、おいしいお茶やコーヒーを淹れられたりすると、コミセンのクオリティは上がるかもしれない。

〈職員〉

高齢者学習の見直しが進むなかで、一年に一回ふりかえりの会を持つ設計にしている。コミセンによっては、ふりかえりを毎回の講座の後に実施するようになり、参加者のニーズを拾ってアクションにつながる事例もあった。まずは、対話する機会を支援する側が「必要」と思えることが大事で、コーディネーターをどう支援するかもセンターとしての役割としてあると感じた。他の機関へのアプローチとして、蓄積してきたノウハウを提供することも可能性があると感じた。

〈専門委員〉

スタッフがこういった動きをやりたいと思えるか、やりきれない内容なのか気がなった。

〈職員〉

他の機関を知るために、リサーチ部隊や対話の場所はこれまでなかったように感じたし、こういった動きから始めていくことを検討したい。

〈職員〉

安心・安全な場づくりをしてサロンを実施している。参加者のなかには、対人関係が難しいと感じている方がコーヒーの香りに誘われて、サロンに参加したことがある。参加したことをきっかけ

に、少しずつコミュニケーションを取り始めるといった変化がうまれている。

〈職員〉

ウィズフェスに目玉をという話もあったが、多くの人が活動やまなびに触れるために、いかに参加してもらうかの仕掛けが改めて必要だと感じた。

〈職員〉

男女共同参画センターとしては、相談事業のニーズから事業展開をしていくことが軸であり、どちらかというとなりパワーレスな方向けである。一方、女性活躍に係る事業などは生涯学習と連携して進めることで、話にもあったひとり親向けの企画などは展開していけるのではないかと感じた。

〈職員〉

印象に残ったキーワードは「リサーチ」「プラットフォーム」である。ウィズあかしそのものがプラットフォームであり、事業もプラットフォームになり得るという話もあり、今あるコンテンツを工夫できると感じた。

また、ウィズフェスのなかで、「多様性を含んだ事業を入れては？」といったアイデアも検討の余地があると感じた。他機関連携については、市の各課とはやりやすいので工夫していきたい。

〈職員〉

間接的な生涯学習と直接主催で開催する部分がある。みんなの学校など間接的な生涯学習を、必要だろうと思って進めてきたところが、改めてウィズあかしの生涯学習の軸ではないかというヒントをもらえた。不登校や性教育などそれぞれのテーマごとでも多様な団体がいて、新しい活動がうまれていることが明石の大事なところであると思う。場づくりで仕掛けているところもあるが、知らない間に、団体同士がつながっていたり、コラボしたりしている。こういった動きがうまれることが、ウィズあかしの生涯学習の支援だと意識してもいいのではと感じた。

## 5. 閉会のあいさつ

〈事務局〉

本日は、たくさんのご意見ありがとうございました。男女共同参画から始まり、前回は市民活動、そして生涯学習をテーマに話をしてきた。それぞれが同じステップで進むのではなく、男女共同参画でいえば一丁目一番地を探る、市民活動では地域のなかに公益に触れる瞬間をどうデザインするのか、生涯学習ではプラットフォームといったキーワードが出てきた。それぞれが個別に動くのではなく、複合型だからこそ、うまく掛け合わせていくことが大切だと感じた。次の専門委員会では、これまでの専門委員会を踏まえ、次のアクション、歩み方をご提案できればと思っている。その先にあるのは、市民のみなさんにこういった話を共有するとともに、ウィズあかしのあり方について一緒に対話する場を持つことを考えている。

